

今回より英語講座を連載すると先号の「GAP短信」欄で予告しましたが、その後検討してみますのに、音声を出さない印刷された文章だけで外国語の指導をするのは至難であることがわかりましたので多年に渡る連載は中止し、今後数回だけ重要なヒントを述べますから、ご了承下さい。いずれ私の書き下ろしで「英語を母国語のように身につける方法」(仮題)と題する本を、録音テープと組み合わせて他の出版社から刊行するつもりです。

しかし、ここに述べるヒントだけでも理解して学習されるならば画期的な進歩が実現しますから、熟読して学習してみてください。

#### ■日本人には、なぜ英語が難しいのか

この理由は明白です。明治以来、日本の学校では「英数」といって英語と数学を基礎学科の王様にしてしまい、そのために英語というたんなる外国語を、まるで難解な学問であるかのごとく神棚に祭りあげたために学生生徒が萎縮してしまい、英語とは難しい学問なのだという先入観にとらわれて手も足も出なくなってしまったのです。この罪は日本政府の文部省にあります。それは別として、英語圏の諸国ではどんな種類の人間もしゃべっている、もとは1民族の言語にすぎない英語という外国語を白人崇拜思想に結びつけるからいけないのであって、ここで日本人は考えを根本から改める必要があります。それは「我々は世界で最も複雑で高級な言語である日本語を駆使する民族なのだ」という自負を持つことによって、英語を良い意味でナメてかかるのです。そうすると気が楽になります。なぜならば、英語というのは日本語に比較して話にならないほどに簡単な言語であるからです。

#### ■英語はあまりに簡単だがゆえに日本人は戸惑う

西洋人の社会では、日本語があまりに複雑なため「日本語はまるで悪魔の言語だ」と(ジョークとして)いわれているそうですが、これを逆に考えれば、我々日本人は、その複雑さきまらない日本語に慣れきっているために、英語の簡単さに戸惑って、そのために英語はムツカシイ!と感じるのです。英語が簡単だということは、主として文法の面からいえるのですが、確かにヨーロッパの各国語をみるのに、文法的にみて英語ほど簡単明瞭な言語はありません。スペイン語やドイツ語は文法が複雑ですけれども、それらは規則的に整然と変化しますから、覚えてしまえばあとはわりと楽なのです。ところが「簡単なことは案外覚えにくい」という心理的な一面があるばかりか、それを学問視して、学校では試験でちょっと綴りが違っても減点というカンペキ主義で教育するものですから、これでは生徒が萎縮するのは当然です。極端に言えば学校の英語教育では試験を全廃して、一種のアソビ感覚でやれば、日本人の英語は飛躍的に向上するでしょう。つまり「しゃべればいいんでしょ?」という非常に気楽に意欲を起こさせるような教育です。しかしそんな学校教育は望むべくもありませんから、せめて各個人で学習する場合はアソビ感覚で楽しくやることですね。難解な学問をやっているんだという悲壮感をツユほど起こしてはなりません。

#### ■徹底して暗記すること

何の分野でもそうですが、知識というものは頭の中にそれをインプットして貯蔵しておいてこそ、必要なときに引き出して応用できるわけです。英語ももちろん、単語や文章、会話の言い回しなどは、とにかくかたっぱしから丸暗記しておかないと、いざというときに役に立ちません。「たんなる棒暗記ではだめだ、応用を利かせるように覚えなけ

ればだめだ」という人もあるでしょうが、そんなことは自室にいて1人で外国語を学ぶときに感じる幻想にすぎません。むかしから毎年海外へ出かける私の体験からみますと、高度な学歴のある人ほど外国語がしゃべれず、黙り込んでいる人が多いようです。なぜか? その人たちが中学・高校・大学を通じて8年ないし10年は英語を学んだにもかかわらず、ウンともスンともしゃべれないのは、学校で教える英語が実地でほとんど役に立たないような英語であることもさることながら、多少とも役に立つ英語を教わったとしても(それは中学の英語がそうなのですが)、試験が終わったとたんに忘れてしまって頭にインプットされていないからです。だいいち中学で一学年進級するたびに英語の教科書を捨ててしまいます。これでは暗記もヘタクレもありません。中学の英語教科書は最も役に立つ口語英語の宝庫なのに、なぜ内容を覚えようとしなかったのか。ここが問題です。

#### ■英語は音声を聴いて覚えること

英語の学習において印刷された参考書を読むだけでは、どうしても無理があります。だいいち頭にインプットする度合いが低いのです。そこで極力すすめたいのは、英米人が吹き込んだカセットテープかCDを聴きながら、それをまねて暗唱することで、これが最重要です。といっても人間が生活行動において必要とする言葉の言い回しのすべてを網羅したカセットテープはありませんから、そこは巧みに編集されたカセットテープとテキストと全訳のついた解説書のセットを買って、それを徹底的に暗記するのです。この頃は英語学習用のビデオのセットまで出ていますから視聴覚を応用して学べば最高です。こうして学習しながら、自分で英語でモノを考えることのできる小さな世界を作りあげるのです。これがまず絶対に必要です。これさえできれば、あとはしめたもので、少しずつ英語の短文を覚えていって、その世界を広げてゆくのです。

テープなどを聴いてある程度英語の発音が正確にやれるようになったならば、あとは会話の本を見ながら、かたっぱしから会話用の短文を丸暗記してゆきます。以前私が出した「ひとりごとでマスターできる英会話」(主婦の友社刊)に収録された英文を徹底的に丸暗記して英会話の大家になった人がいます。それは古くからのGAP会員である首藤秀利君です。彼はこの本だけを持ち歩いてボロボロになるまで読み、暗記して、日常会話は全く不自由なしに流暢にやれるようになったと言っていました。英語をマスターするということは、こんなものです。首藤君は大学の法学部を出た人ですから英語の専門教育を受けたわけではありませんが、英文科出の人を負かすほどに達者に英語を話す学習法は1冊の本の丸暗記であつたわけです。ただし上記の本は絶版になって入手できませんからご了承下さい。ちなみに上記の本はアメリカ・サンフランシスコの日本書店に出てから、日本人留学生たちのあいだで評判になったと聞いています。しかし口語英語の優秀な本があります。それは学研発行の「ニューアンカー英作文辞典」です。この中には自分が言いたい口語の例文は大抵何でもありますから、必要な例文を書き抜いて覚えてゆけばよいのです。英語にも口語と文語の区別があるのですが、まず口語英語をしつかりと覚えるならば文語はしだいにわかってきます。

とにかく「丸暗記している者が勝ち、暗記していない者は負ける」というのは外国語習得の絶対的な法則であって、この法則は実戦の場で文句なしに顔を出してきます。「英語というのは日本語の方言なのだ、ひとつ方言を覚えてやるか」ぐらいの気軽な気持ちでやることですね。(以下次号)



前回では英語の本を1冊丸暗記して英会話の達人になったGAP会員の首藤秀利君の実例をあげました。彼はあの記事を読んでいくと感激し、さらに詳細な手記をよこしましたので、29頁に掲載しましたからお読み下さい。よい参考になるでしょう。

### ■英語のヒアリングにはテープが最高

さて「丸暗記だけでは英語を聴く力は身につかない。本物の英語をうんと聴くことが大切だ。それによって馴れることだ」と言う人があるかもしれません。確かにそのとおりなのですが、しかしこの場合に「馴れる」ということは一日中英語が耳に響いてくる環境の中に自分を置いて、いわば英語漬けの生活をするのが前提となります。そうすると日本語の金切り声やダミ声ばかりが響いてくる日本国内にはダメであって、アメリカかイギリスあたりに住みついてしまう必要があります。それが実現すればよいのですが、誰もおいそれと長年月海外に住むわけにはゆきません。したがって簡単に「慣れることだ」とは言えないのです。しかし独習によってある程度は英語を聴き慣れる方法があります。それは英米人が吹き込んだカセットテープをテープレコーダーで聴いて聴きまくる方法です。

### ■英語に関する4つの能力は全くの別物

大体に英語を話す、聴く、読む、書くの4分野は、それぞれ別物です。しゃべれさえすれば、または聴いておりさえすれば、この4つがすべてやれるようになると思うのは錯覚です。聞き取れなければしゃべれるわけではないと聞いて、ヒアリング専用の録音テープが販売されていますが、これはそれなりにメリットがあるでしょうが、聴いてばかりいては耳は肥えるけれども、必ずしも流暢にしゃべれるようになるとは限りません。このテープで学習した人がさっぱりしゃべれるようにならなかった実例を筆者は知っていますし、昔ニューヨークに多年住んでいた知人(男)が、耳は肥えたもののシロモド口の英語しか話せなかった例もあります。だから、英語を話す、聴く、読む、書く技術は、それぞれ別個に自分でプログラムを組んで、毎日練習をする必要があるのです。そのうちの話す力と書く力の練習の基礎をなすものが、英文の丸暗記であるわけです。戦前の昔、日本に名高い英語学者がいて、英米人顔負けの立派な英文を書いていたそうですが、この人はなんとステイヴンソンの有名な小説「宝島」の原書を一冊丸暗記して、それを応用していたということです。ただし、この英文はもう古い文体ですから、現代の我々にはあまり参考になりません。それどころか90年昔に書かれたオー・ヘンリーの短編小説を日本の高校で教えているといっているアメリカ人は笑っているような状態です。

### ■どんなテープ教材がよいか

これはひじょうに多種類出ていますから、いちがいには言えませんが、私がひんぱんに出入りしている東京駅前のヤエスブックセンターの語学教材コーナーと日本橋の丸善本社の語学教材コーナーで、かたっぱしから手にとってテキストを見たリテープを試聴したりした結果では、昔から語学教材で名高いリンガフォンの「米語初級コース」か、基礎的な力のある人は同「米語中級コース」がよいでしょう。いずれもカセットテープ12本と英文テキストと全訳の解説書がついています。価格は初級、中級共セットにして各¥56,444です。安くはありませんが、それだけの価値はありますね。米語以外にもイギリス英語コースもあります。リンガフォン以外にテープのセットになったものは多種類ありますが、ここでは述べられません。注意すべきは、通

信教育の英語教材で、毎月テープが1本ずつ送ってくる場合、その英語の日本語全訳をよこさず、全訳は次回のテープを送るときに送付するという例が多くあります。これは会員をやめさせないで引き付けようという作戦ですから、要注意です。およそ外国語を学習するのに、英文テキストと注釈書が添付してあるだけで日本語の全訳がないような状態で学習できるものではありません。耳にした英語の意味が即座に理解できてこそ、英語そのものがインプットされるのです。1カ月先に次回のテープを送るまで自分で訳してみろというのは、無責任ともいえるでしょう。

### ■英語と米語は違う

むかし私はアメリカ人宣教師のロバート・カニングハム先生に3年8カ月ほど英語を教わったことがあります。これによって英語の何たるかを把握できたのですが、あるとき先生が次のように言われたことがあります。「日本人は英語を話すときに、口語と文語をこたまぜにし、アメリカ英語でもイギリス英語でもない独特の“英語”をしゃべり、しかも英語特有のリズムのない、ひじょうに奇妙な英語を話す」。人格高潔にして日本をこよなく愛していた先生にしてはえらく辛辣に聞こえたものですが、たぶんそのとおりなのでしょう。少々おこがましい話ですが、当時私がしゃべる英語は、先生にいわせれば「アメリカ人がしゃべっているのかとハッとするときがある」ということでした。これは私がまだ田舎に住んでいた頃のことです。

しかし後にイギリスへ行ってイギリス英語の美しさに魅了された私は(特にヨーロッパでは全体的にイギリス英語が用いられているので)発音をイギリス流に変えようと思った。前述のリンガフォンのイギリス英語のセットを新宿の紀伊国屋で購入し、そのテープを聴きながら猛烈に発音の練習をしたのは、かなり以前のことです。ところが私はどうもアメリカと縁が深く、特にダニエル・ロス氏やアリス・ボマロイ女史らとの交友がづくせいもあってアメリカへよく行くのですが、あちらでイギリス弁でやると、アメリカ人から嫌われるという事実がわかって、結局またアメリカ発音を主体にするようになりましたね。このところは複雑な事情がありますが、とにかくアメリカ人はイギリス英語を笑い、イギリス人はアメリカ英語を軽蔑するという厳然とした事実があるのです。このことはむかし私が出した「ひとりごとでマスターできる英会話」の共著者である米人のアン・デिकासさんの次の言葉でもわかります。「イギリス英語を東京弁とすれば、アメリカ英語は関西弁みたいなものです」。彼女は父君がアメリカ人、母君は日本人で、日米で高度な教育を受けた完全なバイリンガル(2カ国語を母国語とする人)で、関西弁もよく知っていましたから、その相違がわかるのでしょう。したがって、アメリカ英語もイギリス英語も同じものだという人は大悟する必要があります。ただし東京弁と関西弁のいずれがよいか悪いかは次元の違う話であって、どちらか一方に慣れ親しんで、自分の言葉はキレイなのだと思っていれば、それでよいのです。同様に、アメリカ英語とイギリス英語のいずれでも全くかまいませんが、ただし発音に大きな差があることは心得ておくとういでしょう。数年前、私はデンマークGAPから招待を受けて、あちらの大会で英語で講演をしましたが、デンマーク人はイギリス英語を話すので私もそれに合わせてイギリス発音でやりました。いまは相手によって発音の使い分けをするようにしています。本格的に英語を身につけようと思えば、英米のいずれかに決める方がよいのです。(以下次号)



これまでの説明では、英語というのは徹底して暗記することが大切だと述べました。これには異論があると思いますが、どのように突き詰めて考えても、外国語はまさに暗記することによって役に立つということは絶対に否定できません。ただし、この講座の(1)で述べました「英会話書の英文をかたっぱしから丸暗記すること」は秀才型の人間がやることであって、「自分のような暗記力の悪い者には不向きだ」と言う人があるかもしれません。そこで、暗記するための方法として、今回は録音テープをのべつまくなしに聴くことが最良であるということについて詳細にお話ししましょう。

### ■暗記は「慣れ」によって可能になる

そもそも暗記するということには「慣れ」の問題が深く関係してきます。私は60数年昔の子供の頃に近所の映画館で宣伝用に鳴らしていた流行歌の文句を今でもかなり覚えています。毎日同じ歌ばかり響いてくれば、いやでも覚えてしまうのです。この原理を応用するのにテープレコーダーに勝るものはありません。このことは前回で少し触れましたが、あとで詳しく話しましょう。大体にある言葉を覚えるということは、同じ言葉を毎日のように聞かされてこそ覚えるのです。私は仕事からバイリンガル(2 外国語を母国語にしている人)をかなり知っています。この人達は別段秀才や才女ではないのに日本語は日本人同様に話すし英語はアメリカ人同様に話します。この人達の共通点に両親のどちらかがアメリカ人で一方が日本人という実態があり、したがって幼児の頃から両方の言葉を聞かされて聞き慣れているために全身の細胞に2 外国語の言語が染みこんでしまうのです。つまり「慣れ」によって母国語が形成されるわけです。私の親類にはスリランカ人の女性を妻にしている男がいます。この女性は幼児からイギリスで暮らしたために完全なイギリス英語を話しますが(スリランカという国はイギリス英語が公用語です)、前夫も日本人であったために13歳になる混血の娘を連れ子として再婚してきました。問題はこの娘です。私がこの子に日本語で話しかければ全く普通の標準日本語で答えますし、英語で話しかければ実に無造作にイギリス英語で応答します。この女の子は啞然とするほどの完璧なバイリンガルであって、言葉の障壁というもの全く持たない人間翻訳機なのです。慣れによって両言語が身についた典型的見本といえるでしょう。つまりこの娘は家庭では日本人の父親から日本語を覚えさせられ、学校では友達と英語で話し合って成長したために、「自然」に両方の言葉を覚えてしまったわけです。

### ■独習で英語をマスターする方法

ここで明確な事実が出てきます。外国語の習得は知能の相違によるものではなくて「慣れ」そのものによるのだと。こうなると学校で英文法を教えたりするのが間違っていないにしても、いかに時間の無駄使いをやっているかが分かります。極論すれば学校では本物の英語を録音したテープを聴かせて、その意味を先生が説明するだけでよいのです。この頃は全国の中学校が英米人の先生を採用して本物の英語を教えるシステムが確立しましたから、これは良いことですが、問題は年をとった人達が独習によって英語を習得する方法です。これについては英語録音テープが最良の教師であると断言しましょう。私は戦前の昔、小学生の頃から英語の参考書を読みながら英語の独学をしていました。しかし田舎のことで外国人を見たことはなく、ましてや正確な英語の発音は皆自分からず、フリガナを頼りにして、「これが英語の発音なのだろう」と思い込んで自己流の幻想

の英語をやっていたわけです。その頃、英語が録音された機械があって、いつでもそれを再生させて聴くことの出来るような装置があればよいがなあと、夢みたいなことを考えていました。当時、蓄音機というものがあって片面約3分間の78回転の音楽レコードはありましたが、英語教育のためのレコードはなかったようです。

### ■テープレコーダーこそ最大の武器

ところが戦後になってテープレコーダーという機械が出たのです！ 今は世界に冠たるソニーが、戦後トランジスターを用いた携帯用の小型テープレコーダーを出したときには飛びついて購入し、それを映画館に持ち込んでアメリカ映画をしきりに録音した思い出があります。以来テープレコーダーを次々と使い潰しては使用していますが、この文明の利器によって受けた恩恵は図り知れないものがあります。子供の頃に夢にまでみた外人のしゃべる本物の英語を、いながらにして何度も反復して聴けるのですから、これは外国語習得の最大の武器です。これを利用しないという手はありません。ウォークマンで音楽を聴くのもよいでしょうが、暇があれば英語のテープを繰り返し聴き続けると、それが慣れとなって、いやでも本物の英語を覚えるようになってくるのです。書物に書かれた「音声を発しない」英文を、ただ黙って読み流すだけでは絶対に英語は身につけません。その英文を口に出して反復し、暗記することが重要なのですが、間違った発音のままで覚えてはいけませんから、本物の英語のテープを聴きながら覚えることが肝要です。こうしてポケット用テープレコーダーを何台も使い潰すぐらいに聴いて聴いて聴きまくるのです。聴くだけでなく、聴いた英語を自分でしゃべってみることも重要です。そのための一つの方法として、安ホテルへ数日間こもって自分をカンヅめにし、毎日朝から夜寝るまでテープを聴きまくり、大声でしゃべりまくる、という練習もよいでしょう。

### ■究極の英語習得法

究極の英語習得法があります。現在は英米の映画がビデオで売られており、その会話を日英の対訳で収録した本まで出ていますから、これで学ぶのです。私などは往年のアメリカ名画「アパートの鍵貸します」や「エデンの東」その他の映画を対訳本で昔から勉強したのですが、東京へ出てからはそれらのビデオを入手して学習しましたね。若き日のシャーリー・マクレーンやジェームズ・ディーンの声がいまでも脳裏に流れてきます。映画には臨場感がありますし、日常の生きた英語を知るには絶好の教材です。ただし映画の中ではかなり汚い英語をしゃべる場合がありますから、その区別を知るために参考書を調べる必要はあります。この2月に出た馬場信浩著「留学ウォーズ」(講談社)という素晴らしい本の中にも映画による学習法が究極の方法として推奨してあります。ただしこれは中級者以上向きです。

### ■要は信念の力、希望の力、絶対にあきらめない力

私のもう一つの肩書きは英語教育法研究家ですから、ここで熱意をこめて強調したいのは、信念の力の絶対的な重要性です。「自分は必ず英語をマスターするのだ！」という強烈な信念と、すでにマスターしてしまって外人と楽しく英語で語り合っている光景をイメージとして心中に明確に描きながら努力を続けるならば、いつかそのとおりに実現するでしょう。地球人には願望のイメージを描く力がほとんどないと聞いています。そしてすぐにあきらめてしまいます。これではいけません。こんなときこそ宇宙哲学を応用するのです。頑張ってください。(完)